

国立大学

特集

文化・芸術が創造する未来の知

OPINION

劇作家・演出家
大阪大学 COデザインセンター特任教授

平田オリザ



国大協 TOPICS

国立大学協会 第2回通常総会を開催(11/8)



国立大学協会は、11月8日(金)に熊本市内において、令和元年度第2回通常総会を開催しました。

会長が冒頭に9・10月の台風による被災者へのお見舞いを述べた後、理事会の審議状況および各委員会・各支部の活動状況報告が行われました。

また、「2020年度の運営費交付金の配分における共通指標の活用について」および「我が国の教育・研究力強化の推進に関する決議」が了承されました。

さらに、「大学入試英語成績提供システム」の導入見送りに伴い、「『2020年度以降の国立大学の入学者選抜制度—国立大学協会の基本方針—』等の英語認定試験に係る記述部分の運用停止について」の公表および各大学は検討の上、対応を11月29日(金)にホームページ上で公表することが了承されました。

総会後には会長・副会長等による記者会見がありました。

上記の内容については
国大協ホームページ
(<https://www.janu.jp/>) から
ご覧いただけます。



国立大学協会
The Japan Association of National Universities

<https://www.janu.jp/>

国立大学 vol.55 December. 2019

編集・発行 / 一般社団法人 国立大学協会 〒101-0003 東京都千代田区一ツ橋 2-1-2 TEL: 03-4212-3506

国立大学協会

The Japan Association of National Universities

【特集】 文化・芸術が 創造する未来の知

LEADER'S MESSAGE

京都工芸繊維大学長

森 迫 清 貴03

京都という地で文化・芸術と科学の融合：
デザインシンキングによるイノベーション

OPINION

劇作家・演出家

大阪大学COデザインセンター特任教授

平田オリザ05

多文化共生社会における
イノベーション創出の場として大学ができること

Challenge! 国立大学

01 北海道大学09

学芸員のリカレント教育で地域文化の振興に貢献

02 東京大学10

分野融合型のアート研究と実技教育で、
社会の未来をひらく

03 東京藝術大学11

「I LOVE YOU」で、社会を変える芸術の力を発信

04 香川大学12

アート視点で地域の課題の発見・解決を目指す
DRI教育を推進

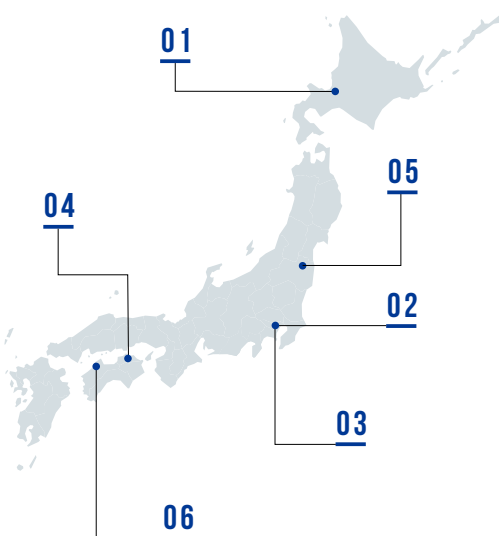
05 福島大学13

アートを学ぶ、アートを感じる
きっと自分の可能性も、地域の未来も見えてくる

06 愛媛大学13

四国の文化を世界へ発信！
「四国廻路・世界の巡礼研究センター」

各国立大学で取り組む『文化・芸術活動』.....14



特 集 に 寄 っ て

社会的価値の創生と人材育成に おける文化・芸術教育の役割

人々が心豊かに過ごせる社会を創る上で、瑞々しい感動や生きることの喜びを与える文化・芸術の関与が欠かせません。欧州諸国では、文化・芸術を基盤としたまちづくりや新たな産業振興が盛んになされていますが、日本には独自の素晴らしい文化・芸術があるにもかかわらず、豊かな精神社会を創る上でのそれらの社会的価値への認識や、文化・芸術と経済活動に密接な関係があることへの認識が十分とは言えない状況がありました。近年になって、新たな価値の創造やイノベーションの創出には、文化・芸術と科学・技術との融合が欠かせないと視点に立った教育が、大学を中心に進められるようになってきました。全ての人々が文化・芸術に親しみ、それぞれの人々が自ら新たな文化を創造していくための環境を創ることが、日本が名実ともに文化国家となり、その基盤の上に優れた学術を発展させるために必要だとの考え方が広がってきています。

本特集では、京都工芸繊維大学の森迫学長からのメッセージ、平田オリザ氏へのインタビュー、そして、国立大学における取組をご紹介します。これらの取組を通して、新たな学術の地平が開かれることや、有為な人材が育成されることが期待されます。



お茶の水女子大学長 室伏きみ子

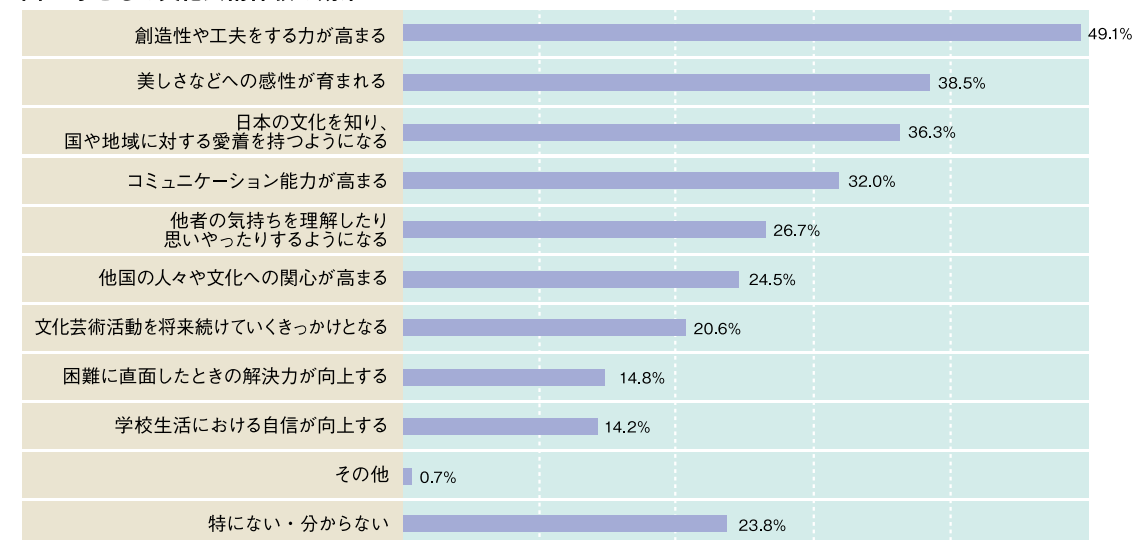
国立大学が創造力を育成する場となる

政府は未来投資戦略2018において、「Society 5.0」などの新しい時代の中でイノベーション（技術革新）の必要性を訴え、新しい価値を創造する力が重要であると位置づけている。イノベーションを生み出し、加速させるためにはScience（科学）、Technology（技術）、Engineering（工学）、Mathematics（数学）のSTEM教育だけでなく、Art（芸術）の力も効果的に活用するSTEAM教育が求められる。

文化庁の行った全国18歳以上の男女に対する文化意識調査によると、子どもの文化芸術体験の効果として最も期待されるものは、創造性や工夫する力を高めることであった（図1）。加えて同調査では、こうした文化芸術体験において重要視されるのが学校における文化・芸術に触れる機会をつくることであるという結果も出ている（図2）。

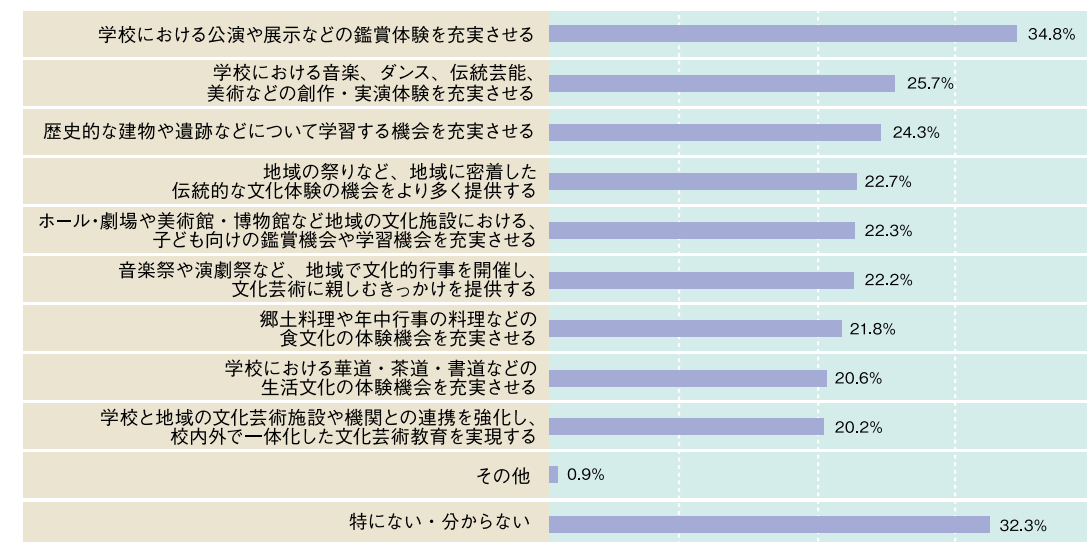
本誌において紹介する各国立大学の文化・芸術への取組のように、様々な芸術に関するリソースを持つ国立大学においては、学生、教職員はもちろん、多くの人が文化・芸術に触れる機会を提供する場として新たな活路を見出すことが期待される。

図1 子どもの文化芸術体験の効果



出典：文化庁「文化に関する世論調査報告書」（平成31年3月） n=3,053、複数回答

図2 子どもの文化芸術体験で重要なこと



出典：文化庁「文化に関する世論調査報告書」（平成31年3月） n=3,053、複数回答

京都という地で文化・芸術と科学の融合：デザインシンキングによるイノベーション

京都という地

そもそも京都とはどのような都市だったのだろう。平安京遷都の794年から1869年の天皇家の東京への移住までの千年以上の間、長期安定的な都として文化を醸成し続けていた。徳川幕府の成立後、政治の中心は江戸に移るが、天皇と寺社の本山は京都に所在し、文化的な中心地であり続けた。17世紀の前半までは日本最大の都市であり、その後も江戸・大坂と並び三都と称せられていた。江戸時代中期からは観光都市としての性格が強まり、寺社を中心とする名所、鴨川河畔などの歓楽街、それを伝える「都名所図会」などのガイドブックも出版されている。もう一つの京都の顔、それは日本最大の工業都市であり、特に高級品の生産に強みを発揮していた。そのブランド力は全国的に知られており、京都の鏡や扇子、あるいは羽織や帯などの商品は重宝されていた。天皇家が東京に移ると公家も共に移住し、御用達の商人も東京に移った。さらに上知令によって寺社にも衰えが見え始めた。このことは、京都の文化・産業の衰退につながることになる。

この危機に最初に立ち上がったのは京都の住民である。1869年に地縁組織である町組を再編し、その核として小学校を中心とする「まちづくり」を始める。都市再生はまず教育、すなわち人づくりからという未来を見据えた取組である。一方で、京都府は「京都策」と呼ばれる近代化政策に着手し、農業、工業、商業の三つの業を勧める「勧業場」という施設を1871年に設置する。この内部に「舎密（せいみ）局」という化学研究施設が設置される。ワグネルを指導者とする舎密局は陶磁器の量産化などにも貢献し、京都の近代化産業の礎となり、数多の京都発企業を生むことにつながっている。この1871年には、京都復興を目的とした「京都博覧会」を開催している。さらに1895年、平安遷都1100年記念祭として第4回内国勧業博覧会が東京以外の地で初めて開催された。この年、琵琶湖流水の発電事業で市電が開業している。

京都は、歴史と文化ゆえに国際的に著名であると同時に、革新的な街であり、現在も本社を京都におくことがブランドであると考えている企業も多い。

【美術工芸資料館収蔵品】



「歓楽の女王」
トールーズ＝ロートレック、アンリ・ド
1892



「ノルマンディ号」
カッサンドル、アドルフ・ジャン
＝マリール・ムーロン 1935



「第18回東京オリンピック 1964年」
電倉雄策 他
1962



「梅図花生」
浅井 忠
1902-1907

京都工芸繊維大学

前身校は、1899年設置の京都蚕業講習所と1902年設置の京都高等工藝学校である。2019年で1899年から120年を経たことになる。「繊維」の源である京都蚕業講習所は、その後京都高等蚕業学校、京都高等蚕糸学校と改名している。一方、「工芸」の源である京都高等工藝学校は、東京、大阪に続く第三高等工業学校として企画されたが、設立委員であり初代校長の京都帝国大学理工科大学教授中澤岩太（無機化学）は、西欧の実業学校を視察するとともにパリ万博の出品調査を行って帰国し、開学の趣旨に「美術工藝の学理とその応用の技術才能を授け、因習的傾向を持つ美術工藝界に刷新の気を与える人材を養成する」と記し、「工業」ではなく「工藝」という名称を採用した。中澤は、工藝学校の基礎教育に絵画教育が必要とし、パリで洋画家の浅井忠に図案科教の就任を要請し快諾を得ている。創設準備のため東京帝国大学工科大学造家学科を卒業した武田五一も留学を命じられており、帰国後着任し、関西で最初の建築教育が始められた。浅井や武田がヨーロッパから図案教育のために持ち帰ったポスターや工芸品、彼らの作品は本学美術工芸資料館に収蔵されている（下写真）。

1944年に官立専門学校となった二つの学校は、1949年にそれぞれ繊維学部、工芸学部として京都工芸繊維大学となった。2019年で大学としては70年である。国立大学法人化後に両学部を統一し、日本で唯一の工芸科学部とした。「工芸科学」とは、科学技術における先端的分野の研究開発を進めるにあたり、人間の真の豊かさの実現に資し、自然・人間社会との十分な調和を図る高次元レベルのテクノロジーを指向するものであり、人間の感性の充実や精神的な潤い、自然の保全などとの関係を強く意図したソフトテクノロジーのことである。これは、博士課程大学院研究科の設置にあたり30年程前に本学第6代福井謙一学長により提案された。

その工芸科学の理念も踏まえ、1999年の開学100周年・大学50周年の時、「科学と芸術一出会いを求めて」を掲げ、講義と実習制作を行う授業科目群を実施した。現在は、京都の伝統工芸を軸に、「知」と「美」と「技」の授業科目群を展開している。

デザインシンキングによる社会・産業変革

現在、日本は少子高齢化、低経済成長という課題が表面化し、急速に深刻化してきている。特に人口減少という事態は、明治維新や新制大学が設置された太平洋戦争後にもまして、実感しにくい変化ではあるが危機的な状況を招きかねない。また、今の日本はモノがない、あるいは不足しているという非常事態とは異なり、モノはあるかも知れないが、将来への不安、あるいは目標が見えないといった人間にとって極めて厄介な状況である。

今必要なのは、明治の京都の町組を倣い、やはり人づくりである。小学校からの見直しも重要であるが、人類全体にとっての高等教育での取組である。それは、明治のときのように先例があるわけではなく挑戦する高等教育でなければならない。何をつくり、何を提供すればよいのかが見えないとき、これまでの価値観、方法に固執していたのでは未来を照らす灯りは見えてこない。

本学では学部・大学院を通じて「テック・リーダー」を養成することを目標に掲げている。テック・リーダーとは、専門分野の知識・技能を基盤として、グローバルな現場でリーダーシップを発揮してプロジェクトを成功に導くことのできる人材をいい、「専門力」、「リーダーシップ」、「外国語運用能力」および「文化的アイデンティティ」の4つの能力獲得を目標としている。

さらに、今年度から、これからの社会イノベーションを牽引する産学公連携、国際連携による博士人材育成プログラム「デザインセントリックエンジニアリングプログラム（dCEP）」を開始した。dCEPは国立大学機能強化によるKYOTO Design Labで実施してきた国際的に著名なデザイナーによる様々な社会課題に対するワークショップとスタンフォード大学の産学連携授業科目ME310の日本拠点として継続的に参加してきた経験から構想したプログラムである。ここでは課題の抽出・分析にデザインシンキングが強力なツールとなる。社会や産業に画期的なイノベーションを起こすには既存の技術にとらわれない、バックキャスト（将来予測、目標）指向の研究開発が必要であり、それには細分化された専門領域を超えた異分野融合が不可欠である。dCEPのような



京都工芸繊維大学長 森迫 清貴

産学公が協働して博士人材の育成に取り組むことで、企業などに有用な博士学位取得者を研究開発プロジェクトリーダーとして供給することが可能となり、社会・産業イノベーションに貢献できる。

デザインシンキングには、人を軸にする姿勢が重要である。工芸科学にあった人間の感性の充実や精神的な潤いを醸成する芸術や文化への弛まぬ関心、それらをかたち創る人間への理解が欠かせない。大学における高等教育の重要な目的の一つは、自己が存在する環境や他者を理解し、自ら深く考えることのできる基盤を築くことである。その結果、科学技術の進展や文化の創造や深化を生じさせ、社会の安定と人類の普遍的な幸福に寄与することになる。芸術・文化は人を引き寄せる力があると同時に、知識を智力に引き上げる潜在的な能力の醸成に資するものである。真のイノベーションに文化力は不可欠である。



デザイン主導未来工学センター（CdE）
パンフレット表紙（ME310/SUGARで開発したスマート水上マシン）

OPINION

多文化共生社会における イノベーション創出の場として大学ができること

日本を代表する演劇人である平田オリザ氏は、小学生から社会人まで幅広い人々を対象とする演劇による教育活動でも多大な実績を上げてきた。現在、複数の大学で演劇を活用したコミュニケーション教育・研究に携わりつつ、大学入試改革や、文化振興に関わる活動にも注力。さらに、2021年に開校が予定されている専門職大学（申請中）の学長としての舵取りにも注目が集まる。今後、大学が新たな活路を見出していくために、文化・芸術とどう向き合い、教育や研究との融合を進めるべきか。芸術と教育の両領域の先端で活躍する氏の考えを伺った。

劇作家・演出家
大阪大学 CO デザインセンター特任教授
東京藝術大学 COI 拠点特任教授
四国学院大学客員教授・学長特別補佐
城崎国際アートセンター芸術監督
劇団「青年団」主宰

平田オリザ

現代演劇界の第一人者として 教育や文化振興などに幅広く携わる

「演劇が万能薬だとは思いませんが、これからの教育や社会づくりに果たせる役割は大きいはずです」

劇作家・演出家として演劇の新たな可能性を追究してきた平田オリザ氏はそう強調する。平田氏は、西洋演劇の方法論に則った日本の現代演劇の在り方に一石を投じる「現代口語演劇」を提唱し、その理論に基づく多くの演劇作品により国内外で高い評価を得る。精力的な創作活動と並行して、演劇の手法を取り入れた教育研究活動にも幅広く携わってきた。

「本業はあくまでも演劇を作ることですが、プロの役者向けに私が開発した演劇のワークショップの手法が高校生の授業にも役立つことが分かってきて、その評判が口コミで広がるうちに教育のお手伝いをする機会が自然に増えていきました」とこれまでの活動の経緯を語る。

アメリカの大学などでは演劇が持つ力が広く認知されており、医者や弁護士を目指す学生が副専攻に演劇を選ぶことも珍しくないという。演劇を学んだ者はコミュニケーション力や表現力に長けた人材として評価されるのだ。一方、日本では演劇による教育効果が注目されることは少ない。

「なぜなら今までは、みんなを同じ価値観に当てはめる教育で高度経済成長が成し遂げられ、多くの人が幸せを感じることができる時代だったから。しかし、これからは異なる価値観を持つ人が互いを認め合って共生する社会にシフトしていきますから、教育も変わる必要があります。そこで演劇の力が大いに役に立つでしょう」

平田氏と大学教育との本格的な関わりは、2000年に桜美林大学が演劇コースを新設する際、助教授として招聘されたのをきっかけに始まる。ここで平田氏は、市民社会に開かれた新しい演劇教育の開拓に取り組み、日本初のリベラルアーツとしての演劇コースを軌道に乗せた。

2006年には大阪大学で後に総長となる当時の鷲田清一副学長に乞われ、同大学コミュニケーションデザイン・センターの教授に就任。大学院の教養教育に演劇の要素を取り入れた教育改革に着手するとともに、社会と演劇の接点を生み出すことを目標に、ロボット研究の第一人者である石黒浩教授と共同で「ロボット演劇プロジェクト」をスタートさせた。

「石黒教授は『社会に入っていけるロボット』の開発を目指していたのですが、どうしても人間らしい自然な動きが作れなかった。そこで私がロボットに細かな演出を加えたところ、見違えるほどリアルな動きに変わりました。石黒教授は『芸術家は先に答えを知っている。それを工学者が分析すれば、一から統計を取るより圧倒的に速く確実に成果に辿り着ける』と言います。このロボットを使用した演劇作品は、多方面からの注目を集め、もう十年くらい世界中で上演を行って

います」

その後 2010 年から四国学院大学で学長特別補佐として、地域の大学における演劇教育の可能性を追究。2015 年には東京藝術大学COI 拠点特任教授に就任し、芸術と科学技術の共感覚イノベーションをテーマに、産学連携によるロボット・パフォーミングアーツの研究を推進。美術学部と音楽学部の学生によるロボットを使ったアート制作の授業を行いながら、“心を育む”教育的コンテンツの開発やロボット観光拠点の開発を目指している。また 2017 年からは大阪大学COデザインセンター特任教授として新たな教育研究領域への挑戦を続けている。

演劇を取り入れた教育が 多文化共生社会に必要な力を育成

これまでに平田氏が様々な人を対象に実践してきた演劇教育は、プロの役者を育てることを目的とするものではない。その主眼は、演劇の力を利用して、これからの多文化共生社会でますます重要となる他者とのコミュニケーションについて学ぶことに置かれている。

「私が高校などのワークショップで多用してきた教材の一つに、『列車の中で他人に話しかける』というスキットがあります。四人掛けのボックス席で目の前の乗客に『旅行ですか?』などと話しかけるシンプルなものですが、実はこれが子どもたちにはうまく言えない。なぜなら現代の子ども多くの場合は、少子化や地域社会の変質などもあって、見知らぬ他人と話した経験がほとんどないからです」

さらに平田氏は、日本人はもともと等質性が高く、他者との対話や議論に慣れていないため、大人でもこうしたコミュニケーションを苦手とする人が少なくないと指摘する。そこで演劇という体験を通して、自分が普段使っている言葉にはないセリフを口にしたり、どういう気持ちでこの言葉を使っているのかを探ることで、他者との「コンテキストのずれ」を意識させていく。

「コンテキストとは本来は文脈という意味ですが、ここでは『どんなつもりでその言葉を使っているか』の全体像を指します。例えば演劇の台本に『砂漠』と書いてあった場合、砂だらけの風景を思い浮かべる人もいれば、あちこちに岩やサボテンがある風景をイメージする人もいる。こうした様々なコンテキストのずれを放置したまま芝居をしようとしても、まともな演劇は成り立ちません。他者との違いを自覚してすり合わせを行うこと、それはすなわちコミュニケーション能力育成の基盤にある『他者理解・多様性理解』を促すことにつながるのです。学校や職場でのいじめの問題も、国家間の摩擦の問題も、その根底にはこうしたコンテキストのズレがあると思っています」

だからこそハーバードでもMITでも、理系の大学院生がアートの授業を受けることが必須になっている。技術開発にお金を注ぎ込むのもいいですが、それよりも人の発想力全体を底上げする方が、圧倒的に安いコストで確実に革新的な成果を生み出せるのです」

先に紹介した大阪大学のロボット演劇プロジェクトは、まさに異分野融合の成功事例だ。芸術と工学という異なる分野の発想と価値観が出合ったことで、劇的な化学変化が起

き、誰も見たことのない革新的成果が生まれた。このような異分野・多文化の融合によるイノベーションこそが大学の最大の価値である、というのが平田氏の考えだ。さらに国立大学の目指す方向性として、「国を豊かにするための教育」をつくっていくべきだと訴える。

「昭和30年代のことですが、豊岡出身の東井義雄先生という有名な教育者が『村を捨てる学力』『村を育てる学力』という概念を提唱しました。これは東京や大阪に良い子どもを送り出す教育に疑問を呈し、本当に大切なのは、共同体を育み、発展させる教育ではないか、と論じた画期的なものです。国立大学の教育も、世界で戦える競争力のある人を育てるだけではなく、これからの豊かな社会を作っていくために本当に必要となる人材を育てるべきだと思うのです」

国際競争力という強迫観念にとらわれるあまり、目指すべき国や社会についてのビジョンもないまま闇雲にグローバル教育を推し進めることに平田氏は警鐘を鳴らす。

「各都道府県にある国立大学は、地域の様々な芸術や文化を支える人材を育てるうえで重要な役割を担ってきました。多種多様な知識・知性を地域に豊かに蓄え、その流出を防ぐ『知の防波堤』『知のダム』なのです。このことを忘れて国際化や効率化といった原理のみで大学教育を考えてはいけません。大学個別の経営ばかり優先するのは、部分最適が全体最適を壊す典型的な事例です。国立大学というのは、大学だけの機能ではなく、社会全体の中でそのファンクションが位置づけられるべき存在なのです」

平田 オリザ（ひらた おりざ） 1962年東京生まれ。国際基督教大学教養学部卒業。在学中に劇団「青年団」結成。1995年「東京ノート」で第39回岸田國士戯曲賞受賞、1998年「月の岬」で第5回読売演劇大賞優秀演出家賞・最優秀作品賞受賞、2003年「その河をこえて、五月」で、第2回朝日舞台芸術賞グランプリ受賞など、現代演劇界を代表する劇作家・演出家として活躍。国際的活動でも高く評価され、2006年モンブラン国際文化賞受賞、2011年フランス国文化省より芸術文化勳章シュヴァリエ受勲。演劇教育や文化行政にも幅広く携わり、現在、東京藝術大学 COI 拠点特任教授、大阪大学 CO デザインセンター特任教授、城崎国際アートセンター芸術監督などを務める。戯曲以外に「演劇入門」「芸術立国論」「わかりあえないことから」など著書多数。

よりも学生一人ひとりの特徴がよく分かると好評です」

さらに今、大学教育分野における平田氏の新たな取り組みとして注目を集めているのが、2021年に兵庫県豊岡市に誕生する専門職大学「国際観光芸術専門職大学（仮称）」（認可申請中）の学長への就任（学長候補者）だ。これに先立つ2015年から平田氏は、同市にある「城崎国際アートセンター」の芸術監督を務め、2017年から市内38校の小中学校で演劇によるコミュニケーション教育をスタートするなど、同市との関係を着々と深めてきた。

「豊岡という土地はもともと外部の人を受け入れるオープンな風土があり、志賀直哉の小説でも知られる城崎温泉に国内外から多くの旅行者が訪れるなど、芸術と観光を柱とする新しい教育を行うのにふさわしい場所だと感じていました。ここにできる新しい大学では、演劇をリベラルアーツの基盤においてコミュニケーション能力を養い、様々な教養の力で自分の人生を設計できる人間を育てていきたいと考えています」と抱負を語る。

地域に大学ができることにより、演劇のワークショップが行える多くの教員もやってくる。彼らが地元の高校で教えることで、高大接続による高度なアクティブラーニングも可能となるだろう。また、地域、企業、大学が協力して豊岡を世界的な演劇の街にするプロジェクトも始まっており、2019年には第0回の国際演劇祭も実施された。目標はフランスのアヴィニョンに匹敵する世界最大規模の演劇祭に育てること。「豊岡なら勝算は十分」と平田氏は自信を口にする。

「この演劇祭で大学生はインターンシップの一環としてアートマネジメントや文化観光政策を学ぶことができます。また、企業にとっては新たなビジネスのヒントを得る場になるでしょう。学生、地域、企業を結びつけ、地域活性化や地方創生のコアとして機能する大学にしていきたいですね」

国立大学の役割は 社会全体の中で位置づけられるべき

新しい時代に対応するために改革を推進することが、あらゆる大学に求められている今、国立大学はどのような取組に力を入れていくべきだろうか。世界を視野に入れて大学の変化に注目してきた平田氏は、改革のポイントとして「異分野・多文化の融合」を挙げる。

「これからのイノベーションは、テクノロジーとリベラルアーツの融合からしか生まれない、というのが世界の趨勢です。

個の本質やコミュニケーション力を見極めるうえで演劇は有効

教育の場で演劇が力を発揮するのは授業だけにとどまらない。平田氏は、入試で受験生の本質を探るためには演劇を取り入れてみるのも一つの手だと言う。

「これからの入試は優劣を数値化してふるい落とす装置から、次の学びのステップとなるものにしていくべきです。これまでの入試では、例えば受験生同士でディスカッションなどをさせても、等質性の高い日本の子どもはすぐに議論の落としどころを見つけようとしてしまい、それぞれの個性や能力が見えてきませんでした。そこに演劇というフィクションの力を導入すると、議論は格段に活性化し、一人ひとりの価値観や本当のコミュニケーション力が引き出されるのです。受験生自身にとっても新鮮な自己発見の機会となり、次の成長につながるはずですよ」

既に平田氏は大阪大学大学院や四国学院大学で、演劇を取り入れたグループワークと面接を組み合わせたユニークな試験を導入し、確かな手応えを得ている。

「個の本質を見る『定性評価』を行うのに、演劇は非常に有効な手段。試験官を務めた教員からも、面接だけの試験



青年団+東京藝術大学+大阪大学ロボット演劇プロジェクト
ロボット演劇「働く私」



豊岡市事業「中・高生アートチャレンジ!」ワークショップ
写真提供＝豊岡市民プラザ

01 北海道大学

学芸員のリカレント教育で地域文化の振興に貢献

ミュージアム勤務の学芸員に スキルアップの機会を提供

北海道大学では、文学部が学芸員養成課程を担当し、毎年 50 ～ 60 名の学生が学芸員資格を取得。卒業生は、博物館、美術館、水族館、動植物園などに就職している。しかし、佐々木亨教授は就労後の状況について懸念を抱いていた。「日常業務に追われてスキルアップを図る機会が乏しいということをよく耳にします。特に北海道にいと東京などで行われる研修に参加することも容易ではありません」。

そこで同大学では、現役の学芸員などを対象に、ミュージアムの中心的活動である展示の企画力を切り口に学ぶの場を提供する「北海道大学学芸員リカレント教育プログラム」を計画。文化庁の「大学における文化芸術推進事業」に応募し 2018 年 3 月に採択され、2018 年度より 3 年間の計画で始動した。

講義のテーマは、展覧会の企画、文化施設のマネジメント、事業評価、資料保存、博物館倫理、ミュージアムグッズの開発など多岐にわたる。1 年目は企画展制作立案時の考え方とスキルを主に座学で習得し、2 年目以降は実践的な活動に推移。プログラム最終年度の 2020 年度は学内にある北海道大学総合博物館で企画展を開催する。集大成となる企画展に向けた準備を通じて、受講生たちが企画展制作に実践的に取り組むプログラムである。

同大学の卒業生でプログラムを受講する山田のぞみ氏も現役の学芸員。「受講生の中には資格は持っているけれど現役の学芸員でない方もおり、施設利用者の視点から課題解決のヒントをいただけます。また、異分野の施設の学芸員さんや文化財保護など周辺領域の方々とコミュニケーションを図る機会も増え、企画の幅が広がりました」と話す。

ミュージアムと市民の つながりを深める取組も

現在の受講生は 40 名。講義は月 2 回のペースで、大半のミュージアムが休館となる月曜日に実施する。中には旭川や帯広、倶知安、あるいは釧路など道内の遠隔地から日帰りで通う受講生もあり、スキルアップに対する意識の高さが窺える。

プログラムの活動は学内だけに閉ざされたものではない。公開シンポジウムや公開イベントなどを学外の会場で開催している。

2019 年 9 月には、現代の文化施設に着目し、人々の学びの在り方や、学びと地域との関係を考えるイベント「文化拠点とまちづくり|ライフスタイル、ライフコース、ミュージアム」を、旭川に近い上川郡東川町で開催。同プログラムの事務局で運営を担う鳥羽早弥佳氏は「イベントに参加した一般市民の方から『学芸員の人たちがどのようなことを考

えてミュージアムを運営しているかを知ることができました』というアンケートの回答がありました。このプログラムはミュージアムと市民とのつながりを深める機能も有していると感じます」と話す。



北海道大学大学院工学研究院 小篠隆生准教授による「文化拠点とまちづくり」の講義風景



「ミュージアムグッズとミュージアムショップ」では、北海道大学総合博物館への新提案をワークショップで探究

社会に評価され、まちづくりに 寄与する施設となるために

佐々木教授は「自分たちの施設がどのように見られているかを把握しないと、社会から賛同を得られません。従来型の博物館評価は説明責任を果たすための点数評価でしかありませんでしたが、たくさんの人々の意見を吸い上げてより良いものにしていく改善型の評価を取り入れる必要があります。また、人づくりやまちづくりもミュージアムの使命の一つですが、そこから遠い存在になっている施設は少なくありません。今後、そうした課題についても本プログラムで取り上げたいと考えています」と語る。

このプログラムを起点に培われた優れた人材、ミュージアムの横断的な企画、そして周辺領域や市民までも巻き込んだネットワークが、北海道の文化・芸術の振興につながることが期待される。



左：鳥羽早弥佳
(とばさやか)
北海道大学
大学院文学研究院
学芸員カブ事務局

中：山田のぞみ
(やまだのぞみ)
本郷新記念
札幌彫刻美術館
学芸員

右：佐々木亨
(ささきとおる)
北海道大学 大学院文学研究院 教授
学芸員リカレント教育プログラム 代表

02 東京大学

分野融合型のアート研究と実技教育で、社会の未来をひらく

芸術家、異分野との連携・協働で、 新たな価値の共創を目指す

2019 年 5 月、東京大学は、芸術創造に関連する多様な分野の研究者が連携し、芸術家との連携・協働も行いながら分野融合型の研究を推進するとともに、芸術的感性の養成を通じた多様な価値観や創造的な発想力を持つ人材の育成を目的に、芸術創造連携研究機構を発足させた。

同機構は総合文化研究科を責任部局に、医学系研究科、教育学研究科、工学系研究科、情報学環・学際情報学府、人文社会科学系研究科、数理科学研究科の 7 部局が連携し、文理を超えて様々な分野から 32 名の教員が参加している。同機構副機構長である加治屋健司准教授は「これまでも芸術に関する研究や授業が行われていました。しかし学部・研究科の壁を越えて教員同士が話す機会はなかなかないため、情報の共有などができていませんでした。そこで教員間のネットワークを作れば学内における研究が活性化すると考え、新たな機構を発足するに至りました」と話す。

7 部局には、本来の学問が芸術のイメージとかけ離れたものもある。そのことについて同機構長である河合祥一郎教授は「例えば医療であれば、患者の心に作用して癒しの効果をもたらすホスピタル・アートが導入されることが多くなっています。幅広い学問が芸術と密接に結び付いていることから、異分野間の連携は意義が深いと考えました」と説明する。

近年、アメリカや中国などで芸術実技を取り入れる総合大学が増えているが、日本ではそうした試みを行っている総合大学はほとんどない。そのような状況の中、東京大学は同機構を設立して芸術実技教育を開始した。しかも、対象は全ての学部 1・2 年生に加え、教養学部と教育学部の 3・4 年生。芸術を専門としない学部生に対し実技の授業を行う理由について、加治屋准教授は「芸術は感性を磨き、多様な価値観を育みます。社会の支配的なメインストリームからは外れていても価値あるものを見つけることは大切で、多様性のある社会に出る前にそれを学ぶのは全ての学生にとって非常に有益であると考えます」と話す。

芸術実技で学生の感性や 社会に適應する力を養成

近年、アメリカや中国などで芸術実技を取り入れる総合大学が増えているが、日本ではそうした試みを行っている総合大学はほとんどない。そのような状況の中、東京大学は同機構を設立して芸術実技教育を開始した。しかも、対象は全ての学部 1・2 年生に加え、教養学部と教育学部の 3・4 年生。芸術を専門としない学部生に対し実技の授業を行う理由について、加治屋准教授は「芸術は感性を磨き、多様な価値観を育みます。社会の支配的なメインストリームからは外れていても価値あるものを見つけることは大切で、多様性のある社会に出る前にそれを学ぶのは全ての学生にとって非常に有益であると考えます」と話す。



東京藝術大学との合同演習にて、同大学の O JUN 教授による授業の最終日に行われた作品講評会の模様

芸術実技の授業を受けた教養学部 4 年の水田隆介氏は、油画とアニメーション制作を体験。『創作』とは芸術的な才能を持つ限られた人たちのものという印象を持っていましたが、そうではないと感じることができました」と振り返る。卒業後は芸術とは直接的な関係のない道へ進むが、「仕事でも様々な人と接する機会が多いですが、相手の立場や価値観を認めることが必要になると考えます。芸術を学んだ意義は大きかったと思います」と話す。

意欲的に広げていく、 芸術と学問をつなぐ活動

同機構では、共同研究、芸術実技の授業、社会連携のほかにも幅広い取組を準備しており、科学技術を用いた共同教育研究の拠点となる「アート・ラボ」や芸術資源を収集・保存、公開・活用する「クリエイティヴ・アーカイヴ」、国内外の芸術家が学内に滞在して創作活動を行い世界に発信する「アーティスト・イン・レジデンス」などを計画している。

河合教授は「発足からまだ半年ほどで、機構として実践できる様々な可能性を模索している段階です。参加する教員も着実に増えていることが勢いとなり、さらに新しい地平が見えてくると期待しています」と話す。

芸術を専門としない教員や学生が、芸術を通じて連携し、あるいは成長することで、社会が抱える課題の解決や、多様な価値観を持つ社会への適応力を高める。それは、芸術に関連した潤沢なリソースを学内に蓄積してきた東京大学だからこそできる取組とも言える。



ルーマニアのシビウ国際演劇祭で総合芸術監督を務めるコンスタンティン・キリアック氏の来日講演も開催



左：水田隆介
(みづたけりゅうすけ)
東京大学 教養学部 4 年

中：河合祥一郎
(かわいしょういちろう)
東京大学 芸術創造連携
研究機構副機構長
大学院総合文化研究科 教授

右：加治屋健司
(かじやけんじ)
東京大学 芸術創造連携
研究機構副機構長
大学院総合文化研究科 准教授

03 東京藝術大学

「I LOVE YOU」で、社会を変える芸術の力を発信

「芸術は人を愛する」をキーワードに “オール藝大”で多種多様な企画を実施

人工知能やロボットなど、科学技術が急速に発展する現代社会において、芸術の役割・在り方や新しい可能性を示すため、東京藝術大学は新しいプロジェクトを立ち上げた。

日比野克彦美術学部長は「本学の教職員は『芸術が次の時代の推進力になる』という意識を持っています。芸術の力を社会に発信するための施策として、人が芸術を作るのではなく、芸術が人を生み出すという意識から『芸術は人を愛する』をキーワードとした『I LOVE YOU』プロジェクトを実施することになりました」と話す。

同プロジェクトでは、芸術が社会の基盤として人に豊かさをもたらすことや、科学・医学・福祉などと結び付き、新たな価値を生み出すことで社会を変え、問題を解決できることを実践によって示し、社会に伝えていく。大学として10件程度の中核企画を実施するほか、学生等からも案を募り、優れた企画には助成金が支給される。10月半ばに締め切った学内公募には約100件の申請が集まり、半数程度が採択される見込みとのこと。全ての企画は2020年の1月～12月を実施期間とするが、プロジェクトはその後も継続する方針だ。

全ての教科に存在し 人材育成に供する芸術の力

なぜ芸術が次の時代の推進力になるのだろうか。また、人材育成において芸術はどのような役割を担うのだろうか。日比野学部長は「学校教育において、図工・美術・音楽だけにアートが存在するわけではなく、言葉で風景を想像したり、植物を観察して形や機能を見つめたり、図形や数式に美しさを感じたりと全ての教科にアートを意識する瞬間があります。あらゆる感性を使い、様々なことを『感じる力』は、次のアクションを起こす、相手を思いやる、自分の気持ちを伝えるなどの力につながり、その人の生き方や人生を形成するうえで重要なものになります」と語る。

「I LOVE YOU」プロジェクト発足の根底には、そうした考え方も息づいている。



「アート×福祉」をテーマに人材を育成する「Diversity on the Arts Project (DOOR)」



2018年度東京藝術大学ゲーム学科（仮）「第0年次」展

芸術と異分野を掛け合わせた 関連プログラムを推進

同大学ではプロジェクトの実施に先駆けて、「I LOVE YOU」のコンセプトに則った関連プログラムを行ってきた。

美術分野において2017年度より開講している「Diversity on the Arts Project (DOOR)」は「アート×福祉」がテーマ。多様な人々が共生できる社会を支える人材の育成を目的とし、芸術が社会的な課題にどのように対応できるかを研究する。「例えば車いすだからこそのことができる世界観や人間関係があります。そこに未知の価値観を見つめる、あるいは新たな価値を生み出す。そうした力が芸術にはあり、多様性を受け入れる社会づくりの基盤としての役割を果たすのです」と日比野学部長は説明する。開講当初は受講者数を20名程度と予測していたが、現在では80名を超える人気のプログラムとなっている。

さらに「Arts Meet Science (AMS)」は、「アート×科学」。より良い社会をつくるために芸術と科学が互いに重なり合い、共有できる力を多様なアプローチで探求する。

「異分野との融合で新しい価値を創出することは、芸術家が社会で担う役割の幅を広げることにつながります。多様性のあるものを認める芸術の価値観や特性を、社会の基盤に展開していく人材を育成していくことも本学の使命であり、学生には感じる心を持ち続け、それを社会に働きかけてほしいと思います」と日比野学部長は力強く語った。



日比野克彦（ひびのかつひこ）
東京藝術大学 美術学部長・大学院美術研究科長
美術学部先端芸術表現科 教授

※このほか、映像分野においては、2019年に大学院映像研究科はゲームコースを新設し、「アート×ゲーム」の取組も進めており、その成果を発信する場を「I LOVE YOU」プロジェクトの一環に位置付け、2020年3月に「ゲーム展」の開催を予定している。

04 香川大学

アート視点で地域の課題の発見・解決を目指すDRI教育を推進

価値あるソリューションを提案できる 「次世代型工学系人材」を育成

これからのものづくりに求められる、ユーザーの視点で未体験の価値を生み出す「次世代型工学系人材」の育成を目指し、香川大学は2018年4月、創造工学部を開設。「デザイン思考・リスクマネジメント・インフォマティクス」を柱とする独自の「DRI教育」を推進している。

同学部には社会的ニーズに対応する7コースが設置されているが、その中で特にデザイン思考による創造に力を入れているのが「造形・メディアデザインコース」だ。このコースには、エンジニアリング、プロダクト、メディアの3分野のデザインスタジオと、これらを有機的に結合させて課題解決を図るソリューションデザインというスタジオがあり、分野を超えた協働や価値創造を学ぶことができる。また、PBL型の演習科目を教育の中心にしている点も特長だ。

造形・メディアデザインコースの柴田悠基講師は「物事を多角的に見つめ、本質を理解し、的確に表現するためのアートな視点とデザイン思考力を身につけることにより、社会に対してインパクトのあるソリューションを提案できる人材を育てたい」と目標を語る。

「瀬戸内国際芸術祭」に作品出展し 学生の成長や地域との連携強化につなげる



江戸時代築の農村歌舞伎舞台での上演風景

同学部では、アート視点により社会の課題を探る取組の一環として、2019年に瀬戸内海の島々で開催された「瀬戸内国際芸術祭2019」に、「香川大学×小豆島夢プロジェクトチーム」として演劇作品を出展した。2010年の第1回からボランティア派遣などで関わってきた香川大学にとっては、初のアーティストとしての参加となる。

「演劇を選んだのは、地域の課題や人々の思いを観客や関係者と共有するのにふさわしい手法だから。また小豆島には今も農村歌舞伎が行われるなど芝居文化が根付いていることから、島民との親和性も高いと考えました」と柴田講師は話す。

役者は公募で選んだ島民や学生などで構成。舞台スタッフは造形・メディアデザインコースの学生が務めた。脚本は、演出家で同大学の地域連携コーディネータも務める豊永純子氏が担当。地元高校生の声を生かして、島の歴史や未来を考える2つの作品を書き上げた。

上演は300年近い歴史を誇る島内の農村歌舞伎舞台で計4日間行われ、毎回ほぼ満席となる大成功を収めた。

音響を担当した同学部2年の岡本大輝氏は「授業では味わえない緊張感の中で、自分の立ち位置や能力を客観的に把握することができました」と語る。「大きな手応えをつかんだ今回の経

験を生かして、これから新しいことに主体的に挑戦していきたい」とも。また、指導にあたった柴田講師は、関わった人の成長と観客の“気づき”を促した点をプロジェクトの成果として強調する。



創造工学部の学生が裏方として舞台を支えた

「ほぼ経験ゼロだったスタッフや役者が達成感と自信を手に入れたことが最大の収穫。実践を通じてチームワークやタイムマネジメント能力も身についたはず。一方、観客からは自分たちの問題を考えるきっかけになったとの声が多く聞かれ、地域の課題発見のためにアートの視点や手法が有効であることを示すことができました」

このほか同大学では瀬戸内国際芸術祭の関連事業として、「瀬戸ルミエール@高松丸亀商店街」というアート作品を出展した。これは瀬戸内海の光をイメージした半透明のシールに人々が希望を書き込み、巨大なガラス面に貼っていく作品。集まった1,100名以上の言葉から、地域の人々の願いや問題意識を浮かび上がらせた。

どちらの取組も自治体や関係者から高く評価され、地元に根ざした国立大学として、より緊密に地域の課題解決を行っていくための連携の強化につながった。

イノベーションを生み出していくために 全学規模のDRI教育プログラムを導入

今回の取組で多くの成果を挙げる一方、「地域の課題を見出すことはできたが、解決策の提示までは至らなかった」と振り返る柴田講師。次のステップに進むためには、より深く問題の本質を探るフィールドワークやリサーチ力を学ぶことの必要性を指摘する。さらに、「アートで考え、工学で解決する、といった異分野融合型の思考を持つ学生や研究スタイルが増えれば、より多様なイノベーション創出につながる」と分野を超えた研究室の連携強化もポイントに挙げる。

同大学ではこのような柔軟で幅広い視野・思考を養う教育を全学規模に広げる施策として、2019年より全学部・全学年の学生を対象とするDRI教育プログラムを導入している。寛善行学長は、DRI教育を共通の基盤に、学内の産学連携組織とも連携した新たな異分野融合型の教育の推進を目指しており、教育と研究を社会に開き、次代の価値創造を担う人材の育成に向けて、同大学は着実に前進を続けている。



左：柴田悠基（しばゆうき）
香川大学 創造工学部
造形・メディアデザインコース 講師

右：岡本大輝（おかもとだいき）
香川大学 創造工学部
造形・メディアデザインコース 2年



「瀬戸内国際芸術祭」
2019 参加作品
「トラと呼ばれたサル」
動画はこちら

05 福島大学

アートを学ぶ、アートを感じる きっと自分の可能性も、地域の未来も見えてくる

福島大学「芸術による地域創造研究所」は、同大学の専門領域を横断した教員と連携研究者（美術館、博物館の学芸員やデザイン、工芸などの他大学の教員）によって構成されている。毎年、福島を拠点に、アートを通した地域活性化に関する学際的な研究を推進してきた。

2004 年から開催されてきた「福島ビエンナーレ」は、同大学の学生、院生が実行委員となり、地域をフィールドにテーマを設定して開催する中で、自分たちが暮らす地域の歴史や文化を考える機会を提供してきた。地域の人々との交流や人材育成、学生の卒業後の進路にも関連する実践的な場となっている。アートの展示やパフォーマンス、アーティストの講演会、シンポジウムなどの多種多様な企画は、「The Japan Times」などの新聞やテレビでの紹介をはじめ、国内外でも広く紹介された。

参加した学生からは、「芸術企画演習で舞台のスタッフとして参加した。基本的



「福島ビエンナーレ」：福島大学の学生が実行委員となり、2004 年に始動した芸術企画

的に個人で制作するものにしか携わったことがなかったので、複数人でつくりあげる芸術を経験できるとも良い機会であった」「アーティストを講師として迎えた企画で、そのグローバルな世界観と考え方に触れることができた。今後は私も芸術の幅を広げられるよう積極的な制作活動をしていきたい」という声が聞かれた。

同研究所は、下記に掲げた7つの研究活動、3つの企画プロジェクトを行っている。

7つの研究活動

1. 芸術文化による「街づくりの必要性」に関する研究
2. 芸術文化を通じた「街づくり・地域の活性化」の事例研究
3. 県内モデル地域における文化政策研究
4. 「アートプロジェクト・芸術」の企画と運営による実践研究
5. 芸術文化による国際交流
6. 東日本大震災後の復興支援
7. 学生の学習効果の検証

3つの企画プロジェクト（一部）

1. 地域産業と連携した研究開発と新たな商品デザイン
 - 主な作品
 - ・商品開発（「ももりんサブレ」など）
 - ・会津本郷焼 11 件の窯元と共同の新作
 - ・「福島県環境と共生する農業」広報ポスター制作（福島県）
 - ・本景観形成促進事業「観光案内看板デザイン」
2. 国、福島県・市の企画事業との「産官民学」連携
 - 主な活動
 - ・「第 20 回全国生涯学習フェスティバル 2008」（福島県）
 - ・「福島こどものみらい映画祭」（福島県）
 - ・「バセオ・ミュージ」（福島市）
 - ・「磐梯熱海アートストリートプロジェクト」（磐梯熱海温泉）
3. 福島大学で企画したアートプロジェクト
 - 主に企画・運営した芸術祭
 - ・「福島ビエンナーレ」（福島市、福島空港ほか）
 - ・「風と土の芸術祭」（会津美里町）
 - ・「豊稔の芸術祭」（湯川村）
 - ・「重陽の芸術祭」（二本松市）

研究所ホームページ
https://www.ad.ipc.fukushima-u.ac.jp/~p107/irc/thema.html

06 愛媛大学

四国の文化を世界へ発信！「四国遍路・世界の巡礼研究センター」

1200年の歴史を有する四国遍路は、今もなお大勢の人々を四国へ誘い、地域の人々もお接待で迎える、生きた四国の文化である。愛媛大学では、2000年から学際的共同研究を続けてきた。長期にわたる研究活動・組織はほかに類例がなく、全国で唯一の研究拠点となっている。2015年 4 月に法文学部附属「四国遍路・世界の巡礼研究センター」を設立。さらに2019 年 4 月には、全学的に組織化して新たなスタートを切った。

同センターは、四国遍路の歴史や現代の実態を解明し、世界各地の巡礼との国際比較研究を行うことを目的として設立された。歴史学、文学、社会学、法学、経済学、観光学など様々な分野の教員が結集し、他大学や博物館・官公庁などとも連携しながら、四国遍路と世界の巡礼の学際的な研究を進めるとともに、四国遍路の世界遺産登録への学術的協力など、地域貢献にも努めている。この研究成果は、ミュージアムでの展示や講演会、刊行物などで公開している。

研究だけでなく、歩き遍路を行う授業や、学生を伴っての霊場調査などは、実践的な教育の場を提供し、社会貢献についても学ぶ機会となっている。県内外の寺院調査に参加した法文学部3回生水松啓太氏は、古文書を読み解くことで先人の知恵や苦勞を知って、郷土への愛着を深め、学芸員になるという目標を持つようになった。

世界遺産化のためには、資産の文化財指定と普遍的価値の証明が必要とされており、四国遍路の霊場の調査を行い、歴史や特徴を世界の巡礼と比較して研究している同センターの活動と一致する。同大学は、世界遺産であるサンティアゴ巡礼の聖地があるスペイン・ガリシア州と四国4県の文化交流事業にも加わっており、2019年度には、四国4県が組織する協議会と協力協定を結ぶなど、さらに活動を促進している。



寺院調査風景



愛媛大学生と遍路道を歩く



Challenge! 国立大学 各国立大学で取り組む 『文化・芸術活動』

日本全国で、各国立大学の特色を生かした
人材育成や地域貢献など、
あらゆる面から文化・芸術活動を行っています。



各国立大学の詳細の取組内容については
こちらよりご覧ください。

北海道教育大学

芸術・スポーツキャラバン
～地域への文化振興および地域再生の核となる人材養成～

岩手大学

平泉出土中国産陶磁器の産地推定および流通消費に関する学際的研究

茨城大学

岡倉天心ゆかりの五浦で続ける文化芸術の研究・発信と
地域ブランディングへの新たな展開

筑波大学

2020 オリンピック・パラリンピック東京大会の文化プログラムに参加！
スポーツとアートの融合による「リボン・アートボール・プロジェクト」の実施

群馬大学

文化芸術による社会包摂事業：インクルーシブアート教育によるつなぐ
学びの場づくり～アートによる「ことづくり＝ひとづくり」～

埼玉大学

地域の公立芸術文化施設・スポーツ団体との連携
～新しいリベラルアーツ教育を担い、地域社会とのつながりを育む相互支援関係～

信州大学

マップ片手にキャンパス巡り：
長野県内5キャンパスの史跡・建物などを地図にまとめた「信州大学歴史探訪マップ」

富山大学

漆塗りのサクソフォンの制作と音色の研究～伝統と先進技術の融合～

金沢大学

文化資源マネージャー養成と文化資源保存・活用の国際ネットワーク構築
～ハイレベルな文化資源マネジメント能力を有するリーダーの育成・輩出～

北陸先端科学技術大学院大学

イノベーションデザイン国際研究センターによる STEAM 教育
～科学の力で徹底的に「美」を追求し、創造の「技」を極め、
文化の質の高さで「感動」を生む～

名古屋大学

世界トップレベルの科学者が集うトランスフォーマティブ生命分子研究所
(ITbM)における「ITbM Gallery：科学と芸術のミックス・ギャラリー」

三重大学

伊勢志摩サテライト海女研究センターにおける大学・博物館・
行政連携に基づく海女文化を生かした研究・教育・地域貢献事業

鳥取大学

「アートマネジメント講座2019」地域を知り、芸術文化を生かして
地域で実践する人・組織間のプラットフォームを構築！

岡山大学

国吉康雄の世界最大規模のコレクションを研究・顕彰・運用し、多様な
コミュニティの中で大学が中心となった地域芸術文化資源の新たな価値付け

広島大学

ひろしま手技すご技再発見プロジェクト
～文化財学を学ぶ文学研究科の学生が「工芸の未来」を考える場所を提供～

山口大学

文化財修復の温故知新：日本画の新潮流および地域密着の山口型・
文化財保存修復研究センタープロジェクト
～理学、工学などの新しい科学的アプローチ～

九州大学

アート活動を通じた“共に生きる社会”の創造
～障害・災害・過疎などの社会課題に芸術活動ができること～

熊本大学

「今ある文化」をテーマとする新しい学問「現代文化資源学」
～マンガ、アニメ、ポップミュージック、演劇、方言を次世代に継承～

大分大学

数寄屋袋を製作することを通して日本の染織文化を学ぶ教材の
開発・公開講座の開催